

# 赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

# NEWS

# 7

July 2026  
#1034



赤十字NEWS  
オンライン版はコチラ



このえ たでてる  
特集▶ P.2 追悼 名誉社長 近衛忠輝氏の軌跡

## こうして青年は「人道の巨人」となった



●2011年・東日本大震災  
岩手県大槌町の被災地に立つ近衛氏。発災翌日(3月12日)に宮城県庁、翌々日(3月13日)に被災地入り。石巻市、陸前高田市、気仙沼市、釜石市、大槌町などの現状を自ら確認して必要な救護活動を指示した

Present!

全国ご当地ハートラちゃんグッズ

A | 全国ご当地  
ハートラちゃん  
47種ピンバッジセット  
3名様



B | ハートラちゃん  
フィギュアキーホルダー&  
クリアファイルのセット  
10名様



詳しくはP.7をCheck!

CONTENTS

### TOPICS

7月は「愛の血液助け合い運動」月間  
“献血の先にある命”を伝える、感謝イベント … P.4

未来へつなぐ“キャラバン”、開催中  
「いのちをまもる勇気」、全国へ … P.5

### 連載

海外派遣の現場から  
パプアニューギニア編Part2 … P.4

けんけつのいま … P.5

### AREA NEWS

[ 秋田 ] スキーパトロール隊と連携  
人命救助の救急法指導員に表彰状

[ 岩手 ] 避難所の環境改善から  
「こころのケア」まで  
大槌町林野火災対応 / 他 … P.6

### WORLD NEWS

アフリカ中央部に広がる脅威  
エボラ出血熱感染拡大と赤十字の対応 … P.8

# このえただてる 追悼 名誉社長 近衛忠輝氏の軌跡 こうして 青年は「人道の巨人」となった



日赤名誉社長・近衛忠輝氏が、  
2026年5月23日に  
逝去されました。  
今号では、半世紀以上にわたり、  
国内外の赤十字活動に身を捧げた  
故人の歩みを偲び、  
深く追悼の意を表します。

**2017年 ● IFRC会長を退任**  
任期最後の連盟総会では、各加盟社や世界中のボランティアに向けて、英語、仏語、スペイン語、アラビア語の4カ国語で謝意を伝えスピーチを締めくくる。参加者が総立ちになり、拍手が鳴り止まなかった。

## 「中立」を胸に身を賭した人助けの道

災害や紛争の現場を歩き続け、半世紀で訪れた国の数は114カ国。やがて「人道の巨人」と称された近衛氏も、青年期からそこに至るまでの歩みは決して容易なものではありませんでした。学生時代、国際的な活躍を夢見て渡った英国で待っていたのは、バナナ1本がご馳走になるほどの極貧生活。帰国後に日赤に入社したものの、現場での叩き上げの時代には幾度となく壁にぶつかりました。国際赤十字に向出した際には、**あらゆる宗教、政治の壁を乗り越えて人を救うため、正義の有無や批判を捨てた中立の精神=「赤十字の沈黙」を貫く覚悟も鍛えられました。**また、日赤の事業で、日本兵として戦った台湾の方に補償する業務では、救うべき人を救う道を模索する中で**「人道の空白地帯を作らない」というモットーが生まれ、生涯その理念を守り続けました。**2009年にはアジア人初の**国際赤十字・赤新月社連盟の会長に就任**。国内外の被災地に自ら足を運び、紛争などの困難に直面する各国首脳らとの交渉を積極的に重ねるなど、人道の精神を具現化するために心血を注ぎ、2期8年間を務めあげました。それらの活動が世界中の赤十字関係者から高く支持され、2022年、国際赤十字・赤新月社連盟が2年に1度個人に授与する最高位**「アンリー・デュナン記事」を受章**。最期まで「人道第一主義」を貫き、赤十字人として人生の幕を閉じました。



## 2005年



**● 日本赤十字社社長に就任  
スマトラ沖地震津波被災地を視察**  
4月に日赤の社長に就任(～2019年)。インドネシアを訪問し、死者・行方不明者22万人以上、数百万人が家を失った「スマトラ沖地震・津波」(発生2004年12月)の被災地を回る。

## 2015年



**● 国際赤十字のトップ二人が  
広島で献花**  
戦後70年の節目に、ICRC総裁ペーター・マウラー氏が来日、IFRC会長の近衛氏と共に、平和記念公園で慰霊碑に献花を行う。

## 2009年

**● 国際赤十字・  
赤新月社連盟(IFRC)  
会長に就任**

「Spirit of Togetherness(連帯の精神)」をスローガンに掲げて会長選に出馬。有効票177票のうち、107票を獲得して、アジア人初のIFRC会長に就任する。以降、世界各地を訪問し、各国政府や国連機関に働きかける「人道外交」を行い、現地赤十字社が抱える諸問題に向き合う。



## 2016年



**● 熊本地震発生。支援・救護を指揮**  
東日本大震災の教訓から、「日赤災害医療コーディネーターチーム」を新たに編成し、迅速で効率的な医療救護活動の実施に貢献。一方で、被災者にも寄り添い、避難所では、損壊した熊本城を「私の実家の屋根も落ちてしまった」と話し、被災した方々を和ませた。(※実家の細川家は熊本城の城主)

## 2017年



**● IFRC会長退任と  
宿願だった  
「ボランティア憲章」採択**  
70歳で会長に就任してから任期8年間で移動した距離は地球36周分の約147万3009km。「赤十字を支えるのはボランティアである」との強い信念から、会長退任の総会でボランティアの責務と権利の指針を示した「ボランティア憲章」を採択させ、ボランティアたちから喝采が起きた。

世界赤十字・赤新月デー  
(赤十字の創始者アンリー・デュナンの誕生日)

誕生  
**1939年5月8日**

**● 旧華族の次男として**  
鎌倉時代から続く名門武家で、肥後熊本藩主を務めた旧華族の細川家に生まれ、後に母方の祖父・近衛文麿(元首相)の養子となる。実兄は元首相・細川護熙氏。

## 1964年



**● 日本赤十字社に入社**  
英国留学中(1963年)、ジュネーブで赤十字創設100周年の記念パレードに日本代表の一人として参加。帰国後、国際的な社会貢献を志し、日赤へ入社。

## 1968年～

**● ネパールで救急車寄贈、  
よど号ハイジャック対応、  
ビアフラ紛争難民支援**  
ネパールでは寄付救急車を自ら運転し1138kmの悪路を走破。「よど号ハイジャック事件」では北朝鮮の赤十字社と連絡調整担当に(1970年)。ビアフラ(ナイジェリア)紛争支援中の赤十字からフランス人医師が脱走して政府を批判、「国境なき医師団」を立ち上げたことを受け、近衛氏は「赤十字の沈黙」への覚悟を強める(1971年)。



救急車を届け、ネパールの人々から歓迎される近衛氏(当時28歳)

## 1983年

**● 「NHK海外たすけあい」  
キャンペーンスタート**  
若手時代にアジア各地を見た経験から、寄付が集まりにくいアジア・アフリカ地域を支援するため、近衛氏の主導でNHKと協働してキャンペーンを実施。現在も続く慣例事業となる。

## 1987年～

**● 日本政府が行う  
台湾人日本兵への  
補償事業を日赤が  
委任され、台湾側との  
交渉担当になる**

## 1991年



**● 雲仙・普賢岳の被災現場へ**  
日赤副社長に就任した直後の6月、長崎の雲仙・普賢岳で大火砕流が発生し、多数の死傷者が発生。被害状況を把握し指揮をとるため現地に入る。

## 1995年 阪神・淡路大震災の 救護所にて



発生2日後に神戸へ。被災した日赤支部の混乱を目の当たりにし、本社から総務局長を呼び寄せ体制作りを奔走。被災地訪問を希望し来日された英王室ダイアナ妃に、被災地の厳しい状況を自ら伝え、訪問を延期していただいたエピソードも。

## 2011年



**● 東日本大震災の被災状況を  
IFRC会長として世界へ発信**  
地震発生からおよそ45分後には災害対策本部を立ち上げ、医療救護班を続々と被災各地に派遣。被災地の現状を世界に向けていち早く発信し、人脈を生かして海外赤十字社との調整に尽力。各国赤十字社から1000億円を超える救援金が寄せられるに至った。

## 2013年

**● IFRC会長に再選  
戦下のシリアを  
訪問**



内戦が続き、赤新月社ボランティア・職員ら48人が犠牲になったシリアを激励のために訪問。砲弾の音が鳴り響き、近くで爆発も起きる中、「人道のために殉戦するならば望」と周囲に語る。

## 2022年

**● アンリー・デュナン記事  
を受章**



**2026年5月23日  
逝去(享年87歳)**



近衛氏の計報を受け、黙祷を捧げるIFRC本部(ジュネーブ)

この紙面で伝えきれない、国内外の貢献を、  
こちらでお読みください。

日赤WEBサイト  
「近衛忠輝氏 追悼ページ」▶



# T P I C S

1 TOPICS

## 7月は「愛の血液助け合い運動」月間 “献血の先にある命”を伝える、感謝イベント

6月12日(金)、横浜SKY献血ルーム(横浜市西区)で、6月14日の「世界献血者デー」に合わせ、輸血経験者やその家族が献血者へ感謝の気持ちを直接伝えるイベントが初開催されました。この



渡辺さん(左)、佐藤さん(中央)からカードケースを受け取る献血者

イベントには、1歳10ヵ月で白血病を発症し、抗がん剤治療と輸血によって病を克服した渡辺奏也さん(赤十字NEWS 2023年7月号で紹介)と、妻の手術を輸血によって支えられた佐藤義寿さんが参加。献血者一人一人に「ありがとう」の言葉を直接伝えながら、『ありがとうの声』(輸血を実施する病院などで集められた感謝のメッセージ)を印字したマイナンバーカードケースを手渡しました。

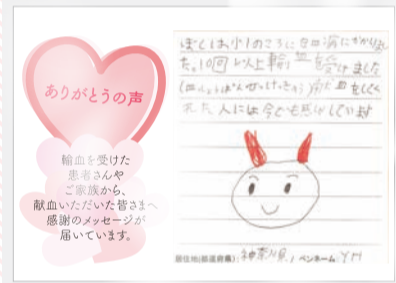
カードケースを受け取った献血者は、渡辺さん、佐藤さんの輸血経験に耳を傾けながら、献血の先にいる人の存在に思いを巡らせ、「**輸血を受けた方と直接会うのは初めてで、貴重な経験になった**」「**自分の献血が実際に役立っているこ**

**とを実感できた**」などの感想が聞かれました。また、初めて献血に訪れたら、このイベントが実施されていたという方からは「これからも機会があれば続けていきたいと思った」という声も寄せられました。

普段は顔を合わせることもない輸血を受けた人との交流によって、献血者が「**献血の先にある命**」とのつながりを感じる、貴重な機会となりました。



1歳で発症、病気を克服して成人を迎えた渡辺さん(左)の話に、聞き入る献血者も



神奈川県限定のカードケース。「10回以上輸血を受けました。献血をしてくれた人には今でも感謝しています」と、輸血経験者の手書きメッセージがプリントされている

### 輸血経験者・家族のコメント

わたなべ そうや  
**渡辺 奏也さん**

「大学に行って学べたり、友人と楽しい時間を過ごしたり、今の生活は、多くの方の献血に支えられているのだと、改めて実感しました」



#### 渡辺さんの闘病記

2023年の赤十字NEWS 当時高校1年生だった渡辺さんのインタビュー記事はこちら



さとう よしひさ  
**佐藤 義寿さん**

「直接感謝を伝えられて、ありがたかったです。輸血は患者本人だけでなく、家族にとっても大きな支えであり、希望につながっていることを知ってほしいですね」



#### 佐藤さんの動画メッセージ

佐藤さんが亡き妻との思い出を語る「LIFE GOES ON #6 君とした「献血200回」の約束」はこちら



## Vol.7 海外派遣の現場から

パプアニューギニア編 Part2

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。赤十字の国際要員たちが見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。



リポーター 北原一希さん  
きたはら かずき

### 温かい人々との、色鮮やかな日々

パプアニューギニア(以下PNG)派遣レポート、後編です(前編は下の二次元コードから)。今回は現地の日常を紹介。治安に不安のあるPNGでは、赤十字の事務所と、生活するセキュリティ付きアパートを車で往復する日々で、自由に外出できません。また、店で食材をまとめて買い、ほぼ3食自炊です。まず朝食は、部屋の中の「バナナ探し」からスタート。青いバナナを大きな房で買い、黄色く熟成させますが、房のままだとすぐに黒くなってしまいますので、部屋のいたる所に1本ずつ分散しています。バナナの朝食を終えたら、迎いの車が来るまでに、昼食のホットドック作り。パンに野菜とソーセージを挟み、リン

ごも準備。PNGの人々は昼食をしっかり食わず、ビスケットやジュースで済ませる人も多いです。そして夜は、インスタントの袋麺を煮て卵を落とす。日本の中華定食が恋しくなります。ちなみに、週末にスパイスから作ったカレーを同僚にふるまったら大絶賛され「職を失ったらPNGでカレー屋をしよう(笑)」と思いました。**PNGの都市部の食生活は、栄養面に課題がある**と感じます。健康的な伝統料理は手間がかかるため、記念日には作りますが、普段は手軽なジャンクフードばかり。だから肌荒れも多いです。また、感染症にも注意が必要です。私も赴任して間もない頃、下痢と頭痛に数日間苦しめ、病院を受診しました。私が受診したのは外国人向けの私立病院で比較的医療水準が高いのですが、診察や検査、点滴、

薬の処方などで4万円ちょっと。これは一般市民の月収ほどです。一方で、国民は原則無料の公立病院に入院すると回復が難しいと聞き、適切な医療を受けられることの重みを実感しました。日本に帰国して思い出すのは、**日常の不自由さより、現地で接した、人懐っこい人々のこと**です。カズキ、カズキ、と気さくに声を掛けてくれ、とにかくよく話す。私が暮らしていた首都ポートモレスビーの朝には、仕事や学校へ向かう人たちの活気があふれていました。街の人とも話せたらな——そう思いながら、通勤の車の窓から眺めていたことが記憶に残っています。



自分で作るホットドックが昼食の定番



独立記念日を祝って、赤十字スタッフも民族衣装を身につけ、伝統料理バイキング



前編&より詳しいレポートはこちら

2 TOPICS

# 未来へつなぐ“キャラバン”、開催中 「いのちをまもる勇気」、全国へ



赤十字講習  
100周年  
特設サイト  
記念キャラバンの  
情報はこちらから

今年、100周年を迎えた赤十字救急法などの講習事業。これを記念し、「赤十字講習100周年記念キャラバン」がスタートしました。キャラバンでは、AEDトレーナーや訓練人形などを載せて全国の日赤支部を巡回。各地で講習体験や普及イベントを行い、命を守る知識と技術の大切さを伝えています。なお、このキャラバンは、12月13日に東京(日赤本社)で開催する「赤十字講習100周年記念シンポジウム」でフィナーレを迎えます。

キャラバンは、全国北海道から沖縄まで「東回りルート」「西回りルート」の2つのルートでゴールの東京を目指します。5月9日、日赤青森県支部では、弘前市内の遊興施設で赤十字救護トラックの荷台をステージにして東回りルートのキャラ



東回りルートの初日、青森では赤十字救護トラックの荷台をステージに「赤十字講習100周年記念セレモニー」が



佐賀から熊本へキャラバンセットを「パットン」タッチ

バン開始を宣言。救急法体験で100周年の記念受講証をもらうなどのイベントが開催されました。

また5月24日、佐賀県支部から熊本県支部に「キャラバンセット」が引き継がれ、会場「イオンモール熊本」で実施された救急法や幼児安全法などの体験コーナーには多くの家族連れが訪れました。

秋田県支部の救急法指導員で、今年2月に人命救助に貢献した佐々木靖彦さんは、「命をつなぐための知識を身につけ、それを行動に移すこと。その意義を各地で開催する講習で体験していただきたいです」と話します(佐々木指導員の救命エピソードは次ページで紹介)。

100年前に始まった学びは、いまま全国各地で受け継がれています。キャラバンは、人から人へ、地域から地域へとつながりながら、次の100年へ向けて走り続けます。

## 7月以降のキャラバン日程

※★は日程調整中

### 西回りルート

- ①山口県(7/4) ②島根県(7/5)
- ③広島県(7/12) ④鳥取県(7/15)
- ⑤香川県(7/18) ⑥岡山県(8/7)
- ⑦愛媛県(8/22) ⑧徳島県(8/23)
- ⑨大阪府(9/5) ⑩高知県(9/6)
- ⑪滋賀県・京都府(9/19 共同開催)
- ⑫奈良県(10/10) ⑬兵庫県(10/24)
- ⑭和歌山県(★)



### 東回りルート

- ①新潟県(7/11) ②茨城県(7/18) ③神奈川県(7/20)
- ④山梨県(7/22~24) ⑤千葉県(7/25) ⑥栃木県(8/8)
- ⑦埼玉県(8/30) ⑧東京都(★) ⑨福井県(9/12)
- ⑩石川県(9/13) ⑪群馬県(9/19) ⑫愛知県(10/12)
- ⑬長野県(10/20) ⑭富山県(10/25) ⑮三重県(10月中)
- ⑯岐阜県(11/3) ⑰静岡県(11/14)

# けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。 vol.15

献血に関するさまざまな取り組みを紹介します。

今回は日赤中央血液研究所

Promoting Blood Donation

## 輸血の副作用を防ぐ「細胞研究」の新成果!



血液型と抗体・抗原の関係は? 雑学コラム「万能血」

血液型の種類は、よく知られている「ABO」や「Rhプラス/マイナス」の他にも数多くあり、現在は40種類以上の血液型が認定されています。血液型は、血液中の赤血球の表面にある、抗原(さまざまなタンパク質や糖)の種類や組み合わせによって決定されます。輸血を受ける前には、血液型の判定検査が行われますが、安全な輸血のために、もう一つ欠かせない事前検査があります。それが、「不規則抗体検査」です。これは、**輸血を受ける人の血液に、特殊な抗体(不規則抗体)が含まれていないかを調べる検査**です。

もし、不規則抗体が患者の血中にあり、輸血された血球の抗原と反応すると、赤血球が破壊される「溶血」が起こることがあります。これを防ぐため、患者から血液を少し取り、さまざまな血液型の赤血球と反応させる検査をします。この検査には、入手が難しい、まれな血液の血

球が必要になることも。そこで日赤中央血液研究所の船戸興自さんが取り組んだのが、「**血液細胞の遺伝子を書き換えて“まれな型の血球”を作り出す**」研究でした。

船戸さんは、「現在は、実際にその血球(血液型)を持つ方の血液を確保して検査を行っています。でも、非常に珍しい血液型の血球は入手自体が難しい。そこで、不規則抗体検査に使いやすいように、血球の細胞が最終的な状態になる前に成長を止め(不死化させ)、血球の表面の遺伝子を書き換え、まれな血液型の細胞を作製しました。しかも、無限に細胞を増やすことができるので、血球の試薬として広く活用できる可能性が見えてきました」と話します。

この研究の成功、実は世界中の研究者を驚かせるものでした。成果をまとめた論文は**国際的な学術専門誌「haematologica」に掲載され、**

**表紙も飾り**ました。国際学会で発表した際には、座長から「**こういう(血液型改変)細胞が作られたことは、非常に素晴らしい!**」と声をかけられたといいます。

船戸さんは、「試薬としての実用化には時間がかかりますが、この成果は検査にとどまらず、血球をデザインできる可能性を示しました。輸血医療に貢献する成果が出てきた、と感じます」と振り返ります。

輸血の安全を支えるため、日赤の研究室では今日も、小さな細胞と向き合う研究が続いています。

船戸さんの研究成果が専門誌の表紙に!



©2026 Ferrata Storti Foundation

# Area News

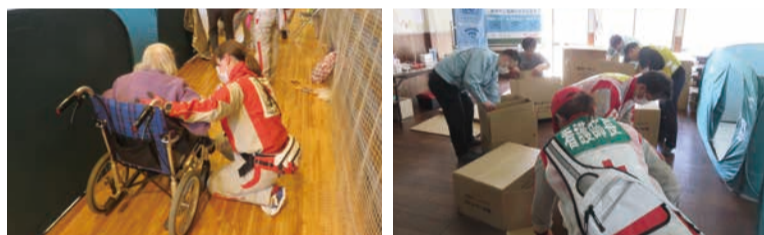
エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。



## 避難所の環境改善から「こころのケア」まで 大槌町林野火災対応



4月22日に岩手県大槌町で発生した林野火災に伴い、同町の住民約3200人に避難指示が発令されました。日赤岩手県支部では、速やかに災害対策本部を設置し、4月30日までの間、救護員を派遣、救援物資の配布や避難所の環境改善、「こころのケア」などを実施しました。避難所開設当初は、暖房器具や仕切りはあるものの、床に布団や毛布を敷いて寝ている状況で、避難者からは「夜はとも寒い」という声も。日赤救護班は、避難所に届いた段ボールベッドの展開補助を行い、同支部が備蓄する安眠セットや寝袋を配布。避難者から大変喜ばれました。幸い目立った健康被害も報告されず、同町からは「日赤を含む保健医療福祉チームの連携が非常に良かったおかげ」との感謝の言葉もいただきました。



## スキーパトロール隊と連携 人命救助の救急法指導員に表彰状



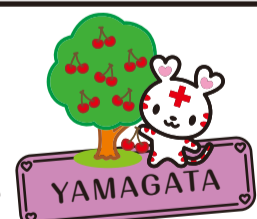
日赤秋田県支部の救急法指導員・佐々木靖彦さんに、日赤の清家篤社長より人命救助表彰状が贈られました。佐々木さんは、今年2月にスキー場にて、心肺停止状態の傷病者に対して、現地スキーパトロール隊員と協力して救命処置を実施。懸命に心肺蘇生に取り組んだ結果、自己心拍と自発呼吸が再開した状態で救急隊に引き継ぐことができ、その方は一命を取り留めました。表彰状の贈呈は4月18日に開催した救急法指導員研修会で行われ、佐々木さんは、「現場のスキーパトロールの皆さんも救急法を定期的に訓練しており、AEDの使用含め、迅速な対応ができたことが救命につながりました」と報告。研修会参加者も熱心に耳を傾けていました。



## 紅白出場歌手の歌声を生で！ 「やごと日赤ふれあい広場」に 歌手・オユンナさん登場



日赤愛知医療センター名古屋第二病院(八事日赤)では、5月16日に「やごと日赤ふれあい広場」を開催しました。当日は、お菓子を使った薬剤師体験など院内4フロアで多数のイベントを展開した他、モンゴル出身の歌手・オユンナさんのステージも。オユンナさんは、13歳のときに名古屋の音楽祭でグランプリを受賞し、日本で歌手デビュー。15歳でNHK紅白歌合戦に出場しています。今はモンゴル在住ですが、お母様が同院で入院されていたご縁で、今回の出演が叶いました。職員も足を止めて聞き入るほどの美しい声で、紅白歌唱曲「天の子守唄」の他、「いい日旅立ち」なども披露し、命と平和のメッセージを届けました。



## 5月は水防月間 洪水災害を想定して 各地で訓練開催



日赤香川県支部は、5月24日に香川県丸亀市で開催された土器川総合水防演習に参加しました。土器川における洪水を想定し、国土交通省、水防管理団体、消防などの関係機関や、香川県と関係市町行政、地域住民が参加。香川県支部は、河川氾濫により陸路では救援でき

ない孤立地域に対し、空路にて救護班を派遣する想定で訓練を実施。自衛隊のヘリコプターに搭乗し、高松赤十字病院の屋上ヘリポートから土器川河川敷に向かって救護班と必要な医療資機材を輸送するなど、緊急時の協力体制や対応を確認しました。(1)

山形県支部は、5月31日に開催された最上川下流、赤川総合水防演習に参加。8年ぶりの開催となった演習会場の酒田市は、日本三大急流の最上川が流れており、令和6年7月には大雨で甚大な被害を受けた土地。演習では、40

団体約2000人が集結し、過去の災害の教訓を生かした訓練に臨みました。日赤の救護班は、傷病者のトリアージや軽・重症者の救護対応などを行い、水防団や関係機関と緊密に連携して取り組みました。(2)



# Area News

## 赤十字運動月間

### 赤十字活動への参加を呼び掛け さまざまなイベントでPR

日赤愛媛県支部では、5月9日に「第3回赤十字フェスタ in 松山大街道商店街」を開催しました。会場には、地元青少年赤十字(JRC)や松山市赤十字奉仕団、学生赤十字奉仕団など総勢130人が集結。「想いの力を、救う力に。」のテーマに合わせて合唱やダンスパフォーマンス、パレードを行い、来場者に感動と笑顔を届けました。(1)

同日、大分県支部では、大分市内の商業施設にて「赤十字キッズパーク」を開催しました。1985年に始まったこのイベントは、今回で32回目。今年は

講習事業100周年を記念して、ハートラちゃんや「人道人間クロスレッド」が登場するステージ「AEDと心肺蘇生のおはなし」を実施。「救急法のこころ」を子どもたちに伝えました。(2)

奈良県支部では、5月11日から24日、近鉄電車の新型車両の車内広告にて、赤十字月間のPRを行いました。同支部の赤十字活動の写真や、ご当地キャラ・鹿ハートラちゃんなどを使った15秒のオリジナル動画を作成し、車内で放映。初の試みでしたが、感想の声が寄せられ、普段赤十字との接点がない層にも広くアピールできました。(3)

山形県支部では、鶴岡市で開催された「第52回鶴岡市子どもまつり」に

出展。救急法体験やキッズユニフォーム試着体験、防災かるた大会を実施し、400人の親子連れが来場。子どもたちからは、「たくさんかかると取れてうれしかった」「心臓マッサージが体験できて良かった」などの感想が聞かれました。(4)



### 全国各地の名所が赤十字色に「レッドライトアップ」

5月の赤十字運動月間に合わせ、全国各地で「レッドライトアップ」を実施しています。福井県支部では県内5カ所実施。勝山市では、ホワイトザウルスの恐竜オブジェがライトアップされました。(1)

熊本県支部では、日赤の前身「博愛社」の設立請願の舞台となった「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」で初めて実施されました。(2)

群馬県支部では、前橋市の臨江閣や富岡市の富岡製糸場など計7カ所で開催しました。(3)

岡山県支部では、5月8日の「世界赤十字デー」に合わせて、岡山城と県庁で実施。(4)

京都府支部は、今年新たに真宗本廟(東本願寺)御影堂門・阿弥陀堂門とローム京都駅前ビルも加わり、県内計7カ所ですレッドライトアップされました。(5)

山形県支部は、舟形町の国宝土偶「縄文の女神」の他、国の重要文化財「旧米沢高等工業学校本館」など3カ所で行いました。(6)

静岡県支部も7カ所で開催。富士山楽座大観覧車富士スカイビュー(7)の他、世界遺産「富士山反射炉」では山下正行市長が点灯スイッチを押しました。

お知らせ

全国ご当地ハートラちゃん応援アワード開催  
～あなたの“推しハートラ”を教えてください～

日本赤十字社 全国ご当地ハートラちゃん

全国47都道府県の魅力をまとった「ご当地ハートラちゃん」。あなたは、どのハートラちゃんが気になりますか? 「癒やされた」「行ってみたい」「地元愛を感じた」など、さまざまな部門で“推しハートラ”を選出します。特設サイトから応援メッセージとともに、ぜひご投票ください。なお、応援メッセージを寄せてくださった方には、プレゼントが当たるチャンスも!

応募要項など詳しくは投票サイトにアクセス!

結果は今後の「赤十字NEWS」紙面でご紹介!

プレゼント

全国ご当地ハートラちゃんグッズ

**A**

全国ご当地ハートラちゃん47種ピンバッジセット

3名様に当たる!

**B**

ハートラちゃんフィギュアキーホルダー&クリアファイルのセット

10名様に当たる!

日赤サービスでも購入可能  
人形サイズ/本体:全高約45mm

日本赤十字社からのお知らせ

常任理事会、代議員会などの会議開催や予算決算など財務に関するご案内・ご報告はこちら▶▶▶

赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!

プレゼントは右の二次元コードから応募ください。応募締め切り: 2026年7月31日(金) ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代わらせていただきます

ご応募はこちらから▶

アフリカ中央部に広がる脅威

# エボラ出血熱感染拡大と赤十字の対応

## 何が起きたの？

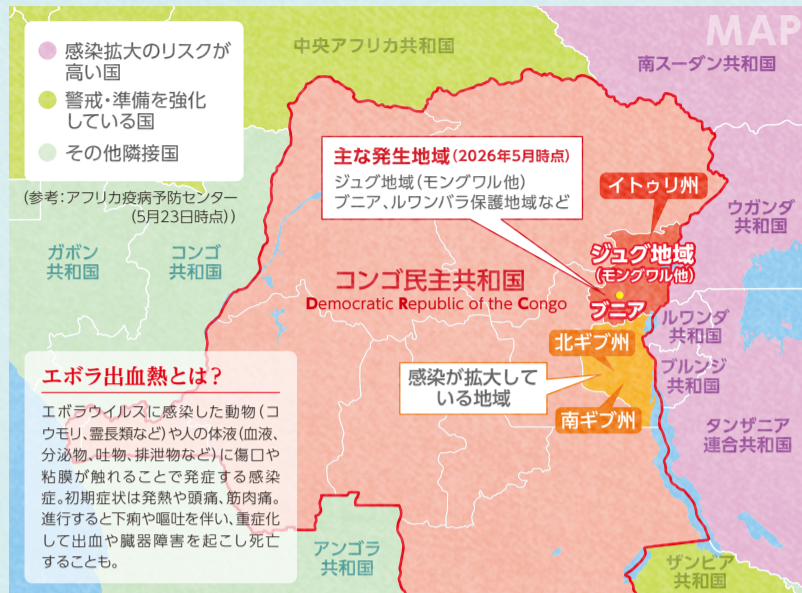
※DRC: Democratic Republic of the Congoの略

- ✓ 2026年5月15日、コンゴ民主共和国(DRC\*)北東部(イトゥリ州ジュグ地域)でエボラ出血熱の発生確認
- ✓ 過去の流行とは異なる「ウイルス株」であることを確認
- ✓ 感染対策が本格化する前に、地域社会や医療施設で感染が広がる

世界保健機関(WHO)が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」宣言を発出

## そのとき、赤十字は…?

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は、DRCおよび周辺国の約300万人を対象とした緊急アピールを発出。  
DRC赤十字社の200人のボランティアが、流行地域の最前線で啓発活動や公衆衛生活動を行う



### 感染の脅威は周辺国にも…

ウガンダ: 越境感染拡大。監視・治療で封じ込め急ぐ  
ルワンダ: 症例なしも国境検査と入国規制強化  
南スーダン・ブルンジ・タンザニア: 流入リスク高まる。監視体制と備え強化

紛争による避難民や労働による国境往来が多い地域のため、1国のみでの封じ込めは困難。多国間の連携が不可欠となっている。



©IFRC エボラ対応の最前線で活動するDRC赤十字社のボランティア



©URCS/IFRC(5月26日撮影) 隣国ウガンダでもエボラ出血熱の発生が確認。感染疑いのある死亡事例に対応したウガンダ赤十字社の対応チームは、遺体の取り扱い、搬送、埋葬までの一連のプロセスを安全に行い、感染拡大のリスクの最小化を図っている

## 現地の課題

- ・人口流動性が高い地域で求められる、国境を超えた感染防止策のための連携
- ・食料不安や栄養不良など複数の人道課題の重複による現地対応能力のひっ迫
- ・戦闘に伴う治安の不安定化による人道・医療活動の制約
- ・葬儀の際に遺体にふれる慣習や誤った情報の拡散が流行の封じ込めを妨げる現実
- ・遺体は特に感染力が強いため、遺体処理が極めて高リスク

## 赤十字の取り組み

## 赤十字ボランティアも犠牲に… 早期発見と地域を巻き込んだ対策を

今年5月にDRC東部で発生が確認されたエボラ出血熱は、承認済みのワクチンも有効的な治療法もない「ブンディブギョ株」。感染拡大を食い止めるには、早期発見と接触者の追跡、感染予防が極めて重要とされます。同国ではこれまで800人以上の感染者が確認され、死者数は約200人以上に(6月17日現在)。DRC赤十字社は、IFRCの支援を受け、保健当局やパートナーと協力し、流行地域での対応活動を行っています。主な流行地域であるイトゥリ州では、**200人の赤十字ボランティアが最前線で活動**し、戸別訪問による啓発活動などを実施。安全で尊厳のある埋葬のため、防護服や資機材の配備も進められています。

その一方で、遺体の感染力は非常に強く、遺体

を扱う作業には高度な危険が伴います。イトゥリ州の東部では、エボラの発生が確認される前に遺体を扱う**人道支援活動に従事していたボランティア3人が感染が疑われる症状により命を落としました**。現地では「遺体を家族が素手で洗淨する」「葬儀で遺体に触れる」といった慣習も感染予防の妨げの一因となっています。

DRC赤十字社および、感染拡大が懸念される隣国ウガンダ赤十字社は、これまでの公衆衛生上の緊急対応において豊富な経験と実績があり、保健省とも協力関係を築いています。今回も、地域社会に根差した活動とボランティアネットワークを生かして、感染拡大の食い止めに力を尽くします。



©IFRC ボランティアが戸別訪問を行い、活動初日だけで645世帯に情報を届ける

## VOICE

ボランティアの声

DRC赤十字社 ボランティア デルファン・シャナムさん



©Jérémie Nzanzu Walaka

### 「尊厳を守りながら、感染拡大を防ぐ埋葬活動を」

**私**たちは、個人防護具を着用し、消毒機材を使用しながら、個人の尊厳を守りつつ、地域への感染拡大を防止するための埋葬を行っています。一部には、宗教的・文化的な考え方や故人への強い愛情から、この作業に抵抗を示す方もいますが、多くの人は、我々ボランティアが適切な方法での埋葬の訓練を受けていることを理解してくれています。

### 人道の現場から

世界の被災地・紛争地で、人道課題と向き合う赤十字活動の最新情報を、「赤十字国際ニュース」(メール配信)でお届けしています。

